

前田雀郎の平句

宇都宮の生んだ「川柳六大家」の一人の前田雀郎の句は、俳句でもない川柳でもない、俳諧（連句）の平句（発句以外の句）の典型とも理解できる。

屠蘇の座にきのふ思へば遙なり

雀郎の句集『榴花堂日録』は、この句より始まる。川柳人・雀郎の句には季語（屠蘇）もあり、俳句（発句）との区別は、芭蕉が晩年に目指した「軽み」の平句（ひらく）的のもの以外に指摘のしようがない。

正月に倦（あき）ると齡（とし）を一つとり

雀郎がこよなく愛した俳諧付句集の『俳諧武玉川』に「正月が四十を越せば飛んでくる」というのがある。そんな趣向の句でもある。本来的に現在の俳句や川柳の原型がここにある。

男とはいつはり者よ泣かぬ顔

この句には季語はない。そして「自嘲」という前書きがある。こういう句に接すると、こういう思いをしたことが胸に去来してくる。「男とはいつはり者よ」と、こういう世界は今の俳句には無縁であるが、それが故に、実に直截的に響いてくる。（江連晴生記）